



## 👁️👁️ みどころ

鬼才キム・ギドク監督亡き今、彼とは全く異質の“作風”ながら、「うまい、安い、早い」の“吉野家路線”を20年以上継続させている韓国の映画作家ホン・サンス監督に注目！

私は、同監督作品を2021年に計4作を立て続けに鑑賞したが、シネ・ヌーヴォの企画によって第2作目と3作目を連続鑑賞。テーマは恋愛、手法は会話劇だが、観光地カンウオンドを舞台として、“1つの出来事”を別れた男女それぞれの視点から描いた本作は実に興味深い。実質的な彼のデビュー作たる本作の面白さを、約20年後の今、再確認したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■共通点と相違点！ホン・サンス vs キム・ギドク！■□■

私がキム・ギドク監督作品をはじめて観たのは、『春夏秋冬そして春』（03年）（『シネマ6』68頁）と『サマリア』（04年）（『シネマ7』396頁）だが、それを観て感動し、以降、彼の作品はほとんど鑑賞してきた。また、『シネマ8』と『シネマ19』では「韓国映画特集」を組むほど、韓国映画の魅力に取りつかれた私は、一方ではカン・ウソク監督の『SILMIDO（シルミド）』（03年）（『シネマ4』202頁）、カン・ジェギョ監督の『ブラザーフッド』（04年）（『シネマ4』207頁）、そしてパク・チャヌク監督の『オールド・ボーイ』（03年）（『シネマ6』52頁）等のものすごい問題提起性に圧倒され、他方では、イ・チャンドン監督の『オアシス』（02年）（『シネマ7』177頁）、パク・チンピョ監督の『ユア・マイ・サンシャイン』（05年）（『シネマ11』257頁）等に泣かされてきた。なぜ韓国映画は、こんなにすごいのか？いつもそう思っていた私だが、残念ながらホン・サンス監督の名前と作品は長い間知らなかった。

それはじめて知ったのは、2021年4月27日に『それから』（17年）（『シネマ4

2』285頁)を観たとき。そこで私は、「韓国映画にホン・サンス監督あり！また、ホン・サンス監督×女優キム・ミニのコンビあり！男女の恋愛劇を会話劇で描く作風は、いかにも韓国的なキム・ギドク監督やパク・チャヌク監督の作風と正反対！おしやれで風刺の効いたそれは、なるほど、こりゃ韓国のウディ・アレンだ。」と書いた。続いて、6月26日に『夜の浜辺でひとり』(17年)、『シネマ42』299頁)、7月9日に『正しい日 間違えた日』(15年)、『シネマ42』294頁)、7月27日に『クリアのカメラ』(17年)、『シネマ42』290頁)と、立て続けに計4作品を観た。そして、「なるほど、これが映画作家ホン・サンス監督の魅力だったのだ！」ということをしっかり理解することができた。

キム・ギドク監督もホン・サンス監督も、2000年頃からの活躍だから、それから約20年。キム・ギドク監督は残念ながら2020年12月に死亡したが、両者に共通するのは、「うまい、安い、早い」という“吉野家路線”を貫徹していること。日本にも世界にも、“巨匠”は多いが、彼らが一本の映画を作るについては、予算・人員・時間の規模がバカでかい。それに対して、キム・ギドク監督もホン・サンス監督も「うまく、安く、早く」作るから、勝負が早い。脚本を自らこなしてしまうことも、両監督に共通している。

他方、両監督の作風は全く違う。キム・ギドク監督は社会問題提起性がメチャ強いうえ、登場人物のキャラもとがっており、何かとどぎつい。また、暴力性も強く、セックス描写も生々しいから、青少年向きではない。それに対して、ホン・サンス監督の映画のテーマはすべて“男女の恋”だし、それを男女の会話劇(だけ)で展開させていくから、下手すれば退屈なものになる。それをカバーするのがホン・サンス監督特有の“構成法”だが、それって一体何？それがわかる人は、ホン・サンス監督作品の中毒になってしまうはずだ。

## ■作家主義ホン・サンス！2作目と3作目を連続上映！■

2021年9月、シネ・ヌーヴォは「作家主義ホン・サンス 韓国映画に新しい時代を創造した2作品」と題して、彼の2作目の『カンウォンドのチカラ』(98年)と3作目の『オー！スジョン』(00年)を連続上映した。彼の1作目の『豚が井戸に落ちた日』(96年)は小説を原作としていたが、2作目は、彼がはじめて自分の着想で脚本を書き監督した作品で、20年後の現在までずっと続けている彼の原点ともいえる作品らしい。

同作が第19回韓国青龍映画祭で監督賞と脚本賞の2冠に輝いたのは、「同じ時に同じ場所を訪れていながらまったく出会うことのない元恋人同士が経験する、似ているようで微妙に違う出来事と心の変化を2部形式でディテール豊かに見せるという構成が見るものを驚かせた」ためらしい。私はホン・サンス監督特有の会話劇と1つの出来事を複数の視点から厚層的に描く構成法を前述の4作で理解し、その面白さを堪能したが、さて、約20年前の彼の実質的デビュー作たる本作でのその展開は如何に？

## ■舞台は江原道！3人の女子大生は、なぜその観光に？■

そんなホン・サンス監督の実質1作目の本作冒頭のシーンは、韓国の北東部にある観光

地・江原道（カンウォンド）に向かう列車の中だ。込み合う列車の中でビールを販売する風景は、コロナ禍の今はなくなってしまったが、20年前なら、なるほど、なるほど。その後、カンウォンド駅で2人の友人と落ち合った女子大生のイ・ジスク（オ・ユノン）たちがカンウォンドを観光する中、1人の現地の警察官（キム・ユソク）と仲良くなっていくストーリーが描かれる。カンウォンドには自然豊かな美しい風景が各地で見られるが、楽しいはずの食事の際に女同士で口喧嘩するのは如何なもの？また、酒を飲むのもいいが、ベロンベロンに泥酔した上、いくら妻帯者とはいえ初対面の男に介抱され、詰所で2人だけで過ごすのも如何なもの？

警察官は若いけれども妻帯者だし、公務員だから、いくら目の前のジスクが泥酔し、無防備な状態であっても、手を出すことは厳禁。しかし、2人の会話劇を聞いていると、至る所で“微妙な雰囲気”が漂っているから面白い。

また、女の3人旅は一方ではベッタリ寄り添っているようだが、他方ではそれぞれ勝手な行動に走る面も……。カンウォンドへの女の3人旅は短いものだったから、せっかく知り合いになった警察官との別れはジスクにとって少しつらかったようだが、それを他の2人はどう見ていたの？もっとも、そうかといって、ジスクが再度あの警察官に会いに行く展開になろうとは！？2人はいつ連絡先を交換したの？そして、旅行から帰った後、2人はいつ連絡を取り合ったの？そして、その内容は？

「2部形式」といわれる本作前半で描かれるのはそんな女の目から描かれる単純なストーリー（？）だが、吊り橋ですれ違った1組の男女は何か曰く因縁がありそうだ。そう思っていると、案の定、カンウォンドでは、1人の観光客の女性が行方不明になったそうだが……。

## ■□■2部形式の後半は？男の目で見えるカンウォンドは？■□■

「2部形式」で構成される本作後半の主人公は、教え子であるジスクと別れたばかりの大学講師チョ・サングォン（ペク・チョンハク）。サングォンがカンウォンド観光に来たのは後輩に誘われたためだが、男の2人旅ではカンウォンドの美しい景色以上に、曰く因縁あり気な美しい女性に興味の目が行くのは仕方がない。もちろん、そんな女性に対するアクションは後輩の方が得意だが、食堂で目をとめた美しい女性に声をかけ、某所での待ち合わせの約束を取り付けたものの、結果はなんと肩透かし。約束をすっぽかされた2人は仕方なく観光を続けたが、別の場所でその女性と再び出会ったサングォンは……。

私は、バブルの時代に日本でも流行った高級“韓国クラブ”に何度も遊びに行っただし、韓国旅行の際もあちこちで“夜の遊び”をしたが、カンウォンド観光の夜となれば、サングォンも後輩も怪しげな運転手（？）に誘われるがまま、怪しげな高級クラブ（？）へ！そこでは、女の子のテイクアウトもオーケーらしい。2000年当時の韓国では、ロシア人女性は高いようだが、韓国人の女の子の一夜のテイクアウトの値段は、How much？

それはともかく、女3人のカンウォンド旅行の終わり方も“微妙”だったが、男2人の

カンウォンド旅行は「ああ、やっぱり・・・」というもの。もっとも、翌朝、帰りの飛行機に乗り損ねたサングォンは、時間つぶしのために訪れたあるお寺でジスクの痕跡を発見することになったからビックリ！さあ、これはサングォンに如何なる影響を・・・？

## ■□■松本清張なら？いやいや、これがホン・サンス！■□■

昭和を代表する推理小説作家・松本清張は、さまざまな社会問題についての鋭い切り込みと分析でも昭和を代表している。そのため、テレビのBS放送では、今なお彼の傑作小説のドラマが何度も放映されている。

しかして、本作前半、ジスクの目から見たカンウォンド旅行で、ジスクは曰く因縁あり気なアベックと出くわしており、カンウォンドで1人の女性が行方不明になったというニュースを、松本清張風に分析し、描写していけば、殺人犯人は誰だ？というスリリングな推理小説的展開に発展してくはずだ。しかし、ホン・サンス流の「2部形式」で作られた本作前半では、1人の女性の失踪という問題提起をするだけで、ジスクがその問題解決のため（犯人追及のため）に協力する姿は登場しない。ところが、後半の、サングォンの目から描いたカンウォンド観光では、約束した時間、約束した場所に現れなかった女への腹いせもあつてか（?）、サングォンは「間違いかもかもしれないが」、「自分の名前を明かすことはできないが」と前置きした上で、「私はある男とすれ違った」と警察に連絡していくから、それに注目！

このように、本作前半では、女3人旅の中で知り合いになった親切的な警察官にわざわざ再度会いに行くという行動をとりながら、ジスクはカンウォンドにおける女性の失踪事件に何の興味も示さなかったが、後半におけるサングォンは、ジスクとは全く異なる行動をとっていくところが面白い。もっとも、そうだから一体何だというの・・・？そう思う人もいるはずだ。そこらあたりがホン・サンス監督の絶妙なところであり、面白いところなのだが・・・。

2021（令和3）年9月27日記